

医科大学国家医学講習科記録

(生徒資料も含む)

石 崎 達

明治時代中期に当時我国で普及していなかった予防・衛生・裁判医学知識レベル向上のため帝国大学医科大学に於て国家医学講習科が明治二十二年に開設され、年二回以上講習科教育が行われた。発端から第十回まで文献及び生徒資料(私の祖父石崎鼎吾)により検討したので報告する。

一、国家医学講習科開設の趣旨

東京大学百年史⁽¹⁾によれば明治廿二年十二月十四日緒方正規、片山国嘉の意見により国家医学講習科が開設された。中外医事新報⁽²⁾に左の記事がある。

「国家医学講習科を設置せり其旨趣たる医師の職務は治療衛生及裁判医学等所謂国家医学の識に乏しきは独り医学の完璧を欠くのみならず邦国の元氣たる生民の健康保全及権利の縮張に關し大に不利なる所あり故に該科を設置し普く有志の医師に国家医学の要領を授け一は以て広く医科の全貌を研修せる医師を増殖し一は以て本邦市区郡医制度成るの日其候補者たるへき資格を有する人物を養成せんことを要するにあり其規則左の如し。

国家医学講習科規則

第一 本科ノ講習科目ハ左ノ如シ

病理解剖式 一週凡ソ三時

衛生学 一週凡ソ五時

裁判医学 一週凡ソ五時

精神病学 一週凡ソ三時

日本医制及衛生法 一週凡ソ二時

第二 本科ノ講習期限ヲ十二週間トス

第三 本科講習者ノ人員ハ每期二十名以上三十名以下トス

第四 本科志望者ハ官公立医学校ヲ卒業シ若クハ内務省成規ノ試験ヲ経テ医術開業免状ヲ得タル者ニ限ル

第五 本科ヲ全ク講習シ了リタル者ニハ講習証ヲ授ケ試験ヲ経テ及第シタル者ニハ及第証ヲ与フ

第六 講習者ニハ授業料トシテ金拾円ヲ前納セシム但事務アリテ半途退学スルモ返金セス

第七 本科講習者募集及授業開始ノ期日ハ凡ソ二ヶ月前ニ公告ス

二 国家医学講習科入学規則

講習科は廿三年発足⁽¹⁾し、その経過は国家医学第一号（明治廿五年五月）⁽²⁾によれば、

「第一回及第二回に於ては府県特選派出生の他に一般志願者よりも十名又は十五名を抽選にて入学せしめ而して此一般志願者の資格は唯開業免状を所持する者と云うのみにて別に入学試験を要せず又第三回以下は唯府県の特選派出生のみにて一般志願者よりは一人も募集せざりしに此回^(註)、明治廿五年第七回募集は府県特選派出生の他に若干人員を一般志願者より採用する由にて既に過日來官報及新聞にて本年三月改正の同科規則第四条第五に当る志願者の入学試験は六

月中旬に挙行すべしと云う尤此回一般志願者より採用する人員は未定の由なれと目下既に出願者続々と現れ出つる由なれば素より採用の人員に超過すべければ其際には同規則第四条第一より第四に当る志願者と入学試験に及第せる者とを合して抽選せしめ其当選者に入学を許すと云う。

○国家医学講習科規則の改正

本年三月改正されし同規則は左の如し

国家医学講習科規則

第一 本科ノ講習科目ハ左ノ如シ

病理解剖学 一週凡三時

衛生学 一週凡十時

法医学 一週凡十二時

精神病学 一週凡四時

日本医制及衛生法 一週凡二時

第二 本科ノ講習期限ヲ四ヶ月間トス

第三 本科講習者ノ人員ハ每期二十名以上五十名以下トス

第四 本科志願者ハ左ノ資格ヲ得タル後一ヶ年以上実地ニ従事セルモノニ限ル

高等中学校医学部卒業生

京成大阪及名古屋医学学校卒業生

医科大学別課医学卒業生

甲種医学学校卒業生

若クハ之ト同等ノ学力アル者

第五講習者ニハ授業料トシテ金拾弍円ヲ前納セシム但シ事故アリテ半途退学スルモ返金セス

第六本科講習者募集及授業開始ノ期日ハ凡ソ二ヶ月前ニ公告ス

○ 国家医学講習科志願者心得

医科大学にては同志願者の便に供せんが為め其心得数個條を定められたり中には前文の規則と同一の條項もあればそれは略して其他の條項のみを挙ぐれば左の如し

医科大学国家医学講習科入学志願者心得 (抄録)

一 国家医学講習科志願者ニシテ入学試験ヲ要スルモノハ試験料トシテ金五円ヲ納ムヘシ

但納付セシ試験料ハ如何ナル事故ヲ生シ試験ヲ受ケサルモ返金セス

撰科及国家医学講習科入学試験課目

解剖学及組織学 生理学 薬物学 病理学 外科学 内科学 産科及婦人科学 眼科学

一 国家医学講習科ニ入学ヲ願フ者ハ右ノ入学願書式ニ拠リ出願スヘシ

入学願書式 (用紙美濃白紙)

入学願書

某儀医科大学国家医学講習科へ入学志願ニ付別紙学業履歴書及開業免状写、(卒業証書アレハ其証書写)相添へ入学御許可ヲ恭請候也

宿所

年月日

本籍族 (戸主ナラサレハ)
何某男或ハ弟等
何 某 印
何年何月生

医科大学長何某殿

石崎鼎吾の記録(4)により更に次の書類が呈出された。

〔第一(既述の通り)〕

第二 入学許可ヲ得タル者ハ直ニ授業料ヲ帝国大学会計課ヘ払込其領収証ヲ事務員ニ示スヘシ

第三 入学許可ヲ得タル者ハ保証人ヨリ左ノ書式ニ準シ在学証明書ヲ呈出スヘシ

但保証人ハ十年以上ニテ東京市内ニ居住セル戸主若クハ本学ニ於テ迪当ナリト認ムル者ニ限ル

(用紙美濃)

在学証明書

宿所

本籍地 (戸主ナラサレハ)
何某何男或ハ弟
何 某 印

印紙

右ノ者今般入学御許可ヲ得候ニ付テハ在学中ニ依ル一切ノ事件当事者ニ於テ引受クヘキ事謹テ保証候也

宿所

本籍地

保証人 何 某 印

何年何月生

年月日

医科大学長何某殿

第四 保証人死亡若クハ戸主タルノ資格ヲ失フトキハ直ニ他人ヲ以テ之ニ代エ更ニ証書ヲ差出スヘシ

第五 日曜日及祭日祝日帝國大学令公布紀念日(三月一日)ハ休業トス

第六 時間割ハ本学級官ノ都合ニ依リ毎期始メ之ヲ定ム

三 石崎鼎吾入学志願関係記録

(一) 履歴書⁽⁵⁾次の如し

履 歴

栃木県士族

石崎鼎吾

一、明治三年三月ヨリ全四年五月迄東京官立医学校ニテ理化学修行

一、明治四年六月ヨリ全五年三月迄軍医総監松本順方ニテ解剖生理薬劑内外科修行

一、明治五年五月七日開拓使官費医学生拜命御雇教師ドクトルスチアルトエルトレーヂ氏へ随従、八年三月迄函館病院

ニテ理化解剖生理薬劑内外科裁判医学大意原他婦人科小児科等口授相受候事

一、生徒取締申付候事

明治六年一月 開拓使

一、生徒取締向尽力ニ付金參円五拾錢下賜候事

明治七年七月十二日 開拓使

一、御用有之亀田、茅部、上磯三郡江巡回申付候事

明治八年三月廿二日 開拓使

一、依願職務差免候事

明治八年六月 開拓使

一、明治八年六月 東京本所緑町四番地江開業

一、雇申付候事

但し月給拾五円給与候事

第二病院当直医兼看護長

明治十年四月十六日 警視局

一、御用有之九州地方へ出張申付候事

上田大隊長ノ指揮ヲ可受事

明治十年五月十七日 警視局

一、第一病院江転勤申付候事

明治十一年一月 日 警視局

一、月給金貳拾円給与候事

明治十二年一月廿四日 警視局

一、第七百六拾八号 栃木県士族石崎鼎吾

右内外医術開業免許候事

明治十二年五月十四日

内務卿 伊藤博文 印

一、鹿兒島逆徒征討之際尽力其勞不少候ニ付金五拾円下賜候事

明治十二年十二月十七日

賞勳局總裁 三条実美

一、本年六月以來東京府下瘧列拉病流行中檢疫事務勉勵候ニ付為慰勞金拾五円給与候事

明治十二年二月 東京地方衛生会

一、依願傭差免候事

明治十三年一月二十一日 警視局

一、明治十三年二月ヨリ全十四年三月迄東京京橋松屋町開業

一、明治十四年四月帰郷 栃木県下都賀郡 壬生町ニ開業

一、栃木県檢疫医申付候事

明治十五年八月 栃木県

一、一級手当支給候事

明治十五年八月 栃木県

一、悪疫終熄ニ付職務差免候事

明治十五年十月卅一日 栃木県

一、客年檢疫事務勉勵候ニ付金壹円五拾銭賞賜候事

明治十六年六月廿一日 栃木県

右之通相違無之候也

明治十八年十月

栃木県下都賀郡壬生町二百八拾壹番地

開業医

石崎 鼎吾

(二) 医師開業免状(写)⁽⁶⁾

栃木県士族

石崎 鼎吾

菊紋章打ち込み 医術ヲ以テ奉職セシ履歴ニ拠リ此免状ヲ授与ス

明治十七年五月十五日

内務卿正四位勲一等 山縣有朋印

此免状ヲ勘査シ第一八九六号ヲ以テ

医籍ニ登録ス

衛生局長

内務省三等出仕正五位勲四等

長與專齋印

四 医学講習科実施経過

(一) 明治廿五年七月国家医学第三号⁽⁷⁾によれば左の記事あり。

「○医科大学国家医学講習科

第七回の講習科に志願せるもの、中入学試験を要する分は客月二十八日より三十日まで都合四日間同学選科入学志願者と共に試験せられたり試験課目は解剖学、生理学、病理学、内科学、外科学、産科及婦人科学、薬物学、眼科学にして試験委員は三宅、大澤、佐藤、青山、大澤(岳太郎)甲野、千葉の諸教授助教授なり而して受験者の数は十九名にして内及第者は講習科に二人(志願者八人)撰科に九人(志願者十一人)合計十一名あり此等の人々は次学年より夫々入学せしめらるゝ由其他国家試験に無試験にて入学の資格ある者の志願者十八名ありと云う。」

国家医学会雑誌第七十号(明治二十六年二月号)⁽⁸⁾によれば、

「○第七回国家医学講習科修了者 帝国大学医科大学に於て昨二十五年十二月十六日第七回国家医学講習科を修了せし者左の如し(官報第二千八百五十三号) 合計四十三名。

石田 肇 大坂、伊藤眞太郎 埼玉、小原久良喜 宮城、横山新五郎 宮城、石井仲琢 福岡、林爲次郎 福岡、渡辺柳吉 岐阜、田部井三郎 東京、一藤元嗣 兵庫、大坪 寛 佐賀、和田玄達 茨城、積山誠吉 長崎、犬塚同一 佐賀、大賀 郁 福岡、加地留太郎 大坂、辻谷幾藏 大坂、今中清吾 奈良、小室昌信 島根、勝又愛次郎 静岡、難波 貢 廣島、村山源三郎 宮城、八木正春 兵庫、北岡幾一郎 青森、下村文蔵 奈良、村尾 敏 長崎、松本道伯 福岡、木村要三郎 島根、森岡鹿三郎 高知、野村道二郎 茨城、松江意之 石川、北崎永次 福岡、森山麟二郎 福岡、久保常三 奈良、東藤九郎 大坂、三木瀧次 福岡、鈴木益枝 山形、國田桂治 岐阜、天野十郎 栃木、御手洗良槌 大分、菅周作 岩手、山野元三郎 兵庫、岸本虎槌 福岡、塩田見龍 徳島」

(二) 国家医学会雑誌第七十号によれば第八回国家医学講習科の記事あり。⁽⁸⁾

「◎第八回国家医学講習科 同科講義は愈去月十六日より開始せられたり其時間割表左の如し⁽⁸⁾ この時間表には第九回(後述)の如き臨床関係の時間がない(表1)

表 1

土	金	木	水	火	月	時
曜	曜	曜	曜	曜	曜	自八時至九時
三浦病方教授	結方衛生教授	結方衛生教授	結方衛生教授	片山醫學教授	岡本助教授	自九時至十一時
同	同	同	同	同	同	自十時至十一時
實	實	實	實	實	實	自十一時至十二時
地同	地實	地實	地實	地實	地實	自十二時至一時
上	上	上	上	上	上	

同講習科卒業記事は国家医学会雑誌第七十四号(明治廿六年六月十五日)に第八回卒業生の記事がある左の如し⁽⁹⁾

- ◎ 国家医学講習科卒業人名 前項の如く第八回国家医学講習科を修了らせる者の氏名左の如し(氏名イロハ順)
- 五十嵐充 群馬、石橋玄伯 千葉、西田謙三 福岡、土井與助 石川、大田三郎 福島、大野吉太郎 愛知、岡田豊吉
 - 廣島、萩原達彦 長野、渡辺草哉 愛媛、川瀬外記次郎 愛知、河合虹平 静岡、我如古楽一郎 沖繩、高田英太郎 福
 - 岡、副島太郎 佐賀、永沼椿平 福岡、中島蕪 福岡、中井 育 福井、村越西三 千葉、村上寛 岐阜、野田音之助
 - 岐阜、野部誠之 東京、野澤道太郎 埼玉、楠木憲吉 千葉、山本小太郎 滋賀、山内 進 福井、松久貫一 岐阜、
 - 間島國三郎 神奈川、馬島清治 佐賀、藤田正夫 愛知、藤井芳哉 大坂、小島 榮 青森、小坂友吉 奈良、秋山金
 - 也 栃木、有賀立雄 東京、東藤三郎 大坂、斎藤記一郎 山形、菊岡昌太郎 宮城、佐竹孝之助 宮城、北島庚吉 佐
 - 賀、結城金吉 埼玉、三輪友吉 愛知、清水 愛 福岡、島田吉俊 福井、白木貫一 岐阜、清水武文 栃木、菅井竹

吉 京都、住友昌次郎 徳島、岩杉金平 奈良

◎ 国家医学講習科卒業生の祝宴 同科第八回国家医学講習生諸氏は、去月十五日午後三時より上野松源楼に教授諸氏を招き祝宴を張られたり着席するや先づ秋山金也氏開会の主旨を演じ次で片山教授の祝詞あり次で中井育氏の答詞及び楠木憲吉、太田三郎、斎藤紀一郎、松久貫一氏等の祝詞あり右終て十二分の歓を尽して散会したるが当日の出席者は六十余名なりしと云う」

(三) 第九回国家医学講習科入学に関する記事は国家医学会雑誌第七十五号(明治廿六年七月十五日)にまず掲載された。⁽¹⁰⁾

「◎ 国家医学講習科及選科生入学試験の結果並問題
第九回国家医学講習科生及撰科生入学試験は去る廿一日を以て完了せり受験者選科十九名講習科九名合計二十六名にして落第せしもの二人選科生は本年志願者沢山なるを以て抽選を以て入学の許否を定められたる由なり今其問題を得たれば左に掲ぐ

解剖及組織学(十九日)

(第一問) 肺臓の造構、脈管、神経 (第二問) 胸骨に起始又は抵止する筋

生理学

飲食消化の器械的作用

一、歯牙の種類、各種歯牙の用 二、舌の運動の種類及各種運動を作為する筋の名称 三、咀嚼に関する筋の名称 四、嚥下 五、胃の運動、種類、神経、呕吐 六、腸の運動の種類、運動を主る神経、脱糞

病理学

転移栓塞の機能及び其作用

内科学(二十日)

(第一問) 腸「チフス」、(第二問) 肺結核

外科学

(第一問) 尿閉 (第二問) 水脈腺肥大

薬物学 (二十一日)

麦角とは如何其有効、成分、生理作用、中毒、適症及処方

眼科学

一患者あり其遠点 (r) は廿五「センチメートル」にして其近点 (p) は十「センチメートル」なり

一、其屈折態は如何 二、調節力 (a) は幾曲光なるや 三、遠用として患者に与ふる眼鏡の種類及び其撰定法如何

産科学

臀位産の所置

(四) 国家医学会雑誌第七十七号 (明治二十六年九月十五日) には第九回国家医学講習科入学者氏名発表された。⁽¹¹⁾

「◎国家医学講習科 今回の医科大学国家医学講習科は入学者四十七名にして今十五日より始業すと云う某姓名左の如し。

(省略・後述)

府県別に四十七名が記入されているが、後述の全員修業記念写真の裏に教官はじめ全員の住所氏名が印刷されており、それを記録したのでここでは重複をさけて省略する。

国家医学会雑誌第八十号 (明治廿六年十二月十五日) によれば第九回国家医学講習科終了記事が掲載されている。⁽¹²⁾

「◎国家医学講習科 第九回国家医学講習科は本年十二月下旬を以て完了するに付第十回は来る廿七年一月上旬より

授業を始めらるゝ由。○同科第十回へ入学志願の者は学業履歴書(卒業証書あらば其写)相添へ来る十二月十日までに医科大学へ願出べし但し入学試験は十二月中旬施行の見込ないと云う。○医科大学助手富岡美矢太氏は同生徒四十八人を伴い横浜水道工事参観の爲め去月廿六日同地へ出張せられたる由。○同科の終了も切迫せるを以て同科生徒は去る二日医科大学構内に於て一同撮影し終て教授助手事務員諸氏を上野櫻雲台に招待し慰勞の宴を開きたり先同科惣代として石崎鼎吾氏開会の趣旨を述べ緒方教授謝辭を述べ赤羽、二宮、堀、小穴、竹内等諸氏の慰勞の演説あり各充分の歡を尽して午後八時過ぎ散会したりと云う」

(五) 国家医学会雑誌第八十二号(明治廿七年二月十五日)には第十回国家医学講習科の開始と入学生人名が掲載された。⁽¹³⁾
「◎医科大学国家医学講習科 本年同科へ入学したる講習生は第十回目にして総数五十名あり講習時間と受持講師は前回と同一にして授業は一月十五日より開始せり今其入学生の名を掲ぐれば左の如し。(イロハ順)

池田芳松 富山、池江喜助 鹿兒島、波多野俊太郎 東京、原幸太郎 静岡、堀江治三郎 愛知、豊浦秀丸 神奈川、
富村玄仙 茨城、千秋芳磨 三重、尾崎捨蔵 新潟、小田定博 愛媛、大塚速水 福岡、奥山孝康 愛媛、岡田忍岳 富
山、渡辺義文 岐阜、片桐重明 東京、川崎五郎兵衛 富山、神岡常七 埼玉、田口正三 岐阜、瀧井驪吉 福岡、垣
内萬寿太郎 和歌山、難波江金多 愛知、永濱萬吉郎 佐賀、村松林外 京都、宇都宮休次郎 東京、宇野甚三 富山、
黒田貞三郎 茨城、工藤万寿司 山形、栗栖菱三 奈良、山口石男 岐阜、山本禮之 和歌山、矢島忠 東京、増子貞
策 栃木、船田昌衛 愛媛、小久保忠作 埼玉、児玉善吉 秋田、小林爲三郎 茨城、是澤恂一 香川、小堀鉦四郎 茨
城、近藤寛治 山梨、阿部恒治 山形、天野快三 神奈川、岸良雄 奈良、菊池武恆 東京、光永常次郎 山口、柴田
有終 青森、白井満 愛媛、白井要 香川、弘生三馨 愛媛、平野其夫 栃木、須田亮三郎 福井。

(六) 石崎鼎吾講習生になる迄の経過

鼎吾は国家医学講習科発足(明治廿三年)以来栃木県庁内務部長に入学(県派出生)を希望していたと思われる。その証

扱書類を次に示す。⁽¹⁴⁾

(一)「内三第四四二号

第四回国家医学講習科入学志願申立置候處今般大学総長ヨリ別紙写シノ通り回答相成候ニ付今回ハ許可不可成御領承之段御通達候也

明治二十三年十二月十三日

栃木県内務部長 徳久恒範印

石崎鼎吾殿

往第一〇四七、往第一二一九及往第一二一九号ヲ以テ浅野虎三郎外二名本学医科大学国家医学講習科へ入学ノ義ニ付御照会ノ趣了承仕候処他府県庁ヨリ申込意外数多有之候ニ付テハ各県庁申込人員ノ比例ニ從ヒ先例ニ依リ到着順ヲ以テ左記ノ者壹名第四回募集之内へ入学可免許其条此段及仕答候也

明治廿三年十二月

帝国大学総長文学博士 加藤弘之

栃木県知事 折田平内殿

浅野虎三郎

(二) 明治廿五年の公文書⁽¹⁵⁾

「〇三第七四五一号

第八回医科大学国家医学講習科生徒募集ニ付本県特選派出之儀其筋ヨリ照会之次第も有之候其条入学御志願ニ候ラバ特選派出之儀来ル十月迄ニ郡衙ヲ経テ当庁へ御出願有之度渡規則及講習者心得共相添此段申進候也

明治廿五年十二月二日

栃木県内務部 印

石崎鼎吾殿

追テ本文入学ノ許否ハ医科大学ノ都合ニ寄り致儀ニ付或ハ本願入学相成兼候場合有之事モ難計確定之上ハ追テ通報可
致候將又経費ハ悉皆自弁ト御承知有之度爲念申添候也

この回も入学不採用であつた。

(三) 明治廿六年の公文書⁽¹⁶⁾

「内三第四九四七号

医科大学国家医学講習科第九回受業来ル九月十五日ヨリ開始ニ付受業料金拾弍円持参同日八日午前九時出頭可致旨通
達方照会有之候条右時刻迄ニ出頭可致間此段及通達候也

明治廿六年八月十四日

栃木県内務部 印

石崎鼎吾殿

追テ御入学ノ上ハ其旨当庁へ届出相成度此段申添候也

鼎吾は第九回で入学許可されたことになる。

五、講習科授業内容

第九回国家医学講習科授業時間割表を表2に示した。⁽¹⁷⁾この時間表は九月十五日より十二月二十二日まで実施された。

時 間 表

	土	金	木	水	火	月	
	病理	衛生 緒方		衛生 緒方	法医 片山	法医 岡本	8時
	病理 三浦	法医 片山	法医 片山	全上	全上	全上	9時
	衛毒生物 実地研修	衛毒生物 実地研修	毒物 高橋	精神 榑	衛生 緒方	精神 榑	10時
	黴菌 実地研修	黴菌	全上	全上	全上	医衛生 三宅	11時
	小児科	外科	外科	内科	外科	内科	正午 1時
	診断学	内科	眼科	眼科	診断学	眼科	2時
	薬物学	薬物学	婦人科	検眼鏡	検眼鏡	産科	3時
							4時

規定の主要課目すなわち法医学、衛生学、精神病学の外に毒物学、衛生学実習、黴菌学及実習などがある。午後は病院に於て見学か講義が行われた。内科、外科、小児科、婦人科、産科、眼科、診断学、薬物学の時間割があり、鼎吾はすべての科目でノートを残しているので講義が行われた。衛生医事法も勿論月曜午前に講義されている。

鼎吾は横野洋式ノートに鉛筆で横書筆記した。一科目五十乃至八十頁にわたり清書してある。次に科目毎に表題と講

師をまとめた。⁽¹⁸⁾

法医学 片山国嘉教授、岡本梁松教授

衛生学 三浦守治教授

病理解剖学 術式・講義・見学

精神病学 榊 俶教授

毒物学 高橋順太郎教授

医事衛生学 三宅 秀教授

微生物学 指導教官名なし

生理学 全

裁判医学 全

顕微鏡学 全

同時に次のノートがあった。⁽¹⁹⁾

外科治方論ヒルギヒエ・ハクル・シツテル・レーン第一大学東京医学校外野氏口授

第一器械学 インストルメント・レーン

第二繃帯学 ワルトンド・レーン

第三手術学 オペラチオンス・レーン

第四薬剤学 アルツイイシツテル・レーン

授業は講義・見学・実習に分かれていたので鼎吾の記録からみて約五十名の生徒は五班に分けられ、総代（取締）五氏が任命された。⁽²⁰⁾

現住所

湯島三丁目八五高林貞方

岡野林次郎

本所竜岡町廿一轟方

梅津 清中

本郷六丁目四山中伝吉方

犬飼 元良

神田淡路町二丁目関根屋方

目澤 富雄

神田宮本町一大橋いち方

石崎 鼎吾

鼎吾は辞令(写真1)⁽²⁰⁾と取締役慰勞金が二回(写真2・3)⁽²¹⁾出ている。百疋とは廿五錢相当という。

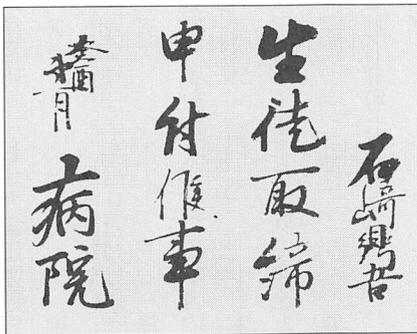


写真 1

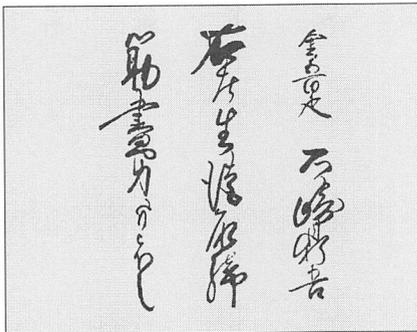


写真 2

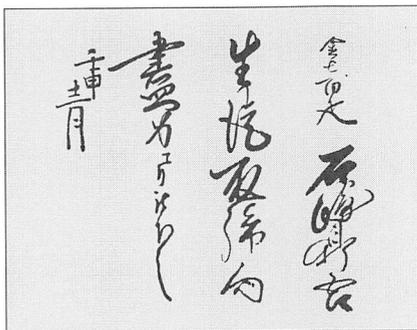


写真 3

鼎吾受持の生徒の病理解剖時通知先と氏名は次の如くである。⁽²²⁾
甲組

駿河台西紅梅町十二山下方寄留

甲ア 竹内 軌栄

本所弓町一丁目十九塩田太郎吉方

乙ア 堀 禮治

神田淡路町一丁目一日置志フ方

乙ア 浅石 長雄

麴町一番町四十六番二松学舎内

丙ア 木谷貴惣太

飯田町三丁目二番地浜田玄達方

甲ア 真島 丹吾

駿河台袋町七番地山本方

丙ア 渡辺 元一

神田猿楽町三丁目三安田正則方

乙ア 高比良照民

乙ア 久保田亀鶴

丙ア 林 義一

神田表神保町十番地板倉方

三宅 義一

六、国家医学講習科修了証書

鼎吾は修了証書二通を残している。

修了証書は写真4に示した。椽木県とは当時の正式の名称で、栃木はその略字である。

修了試験合格証書は写真5に示した。

前者は石崎鼎吾であり後者は石崎鼎五である。鼎吾自身のみならず履歴書の公文書まで鼎吾であったり、鼎五であったりしているが戸籍上の正式の名は鼎吾であるため、本文ではすべて鼎吾に統一した。この証書は書き改めることが出



写真 4

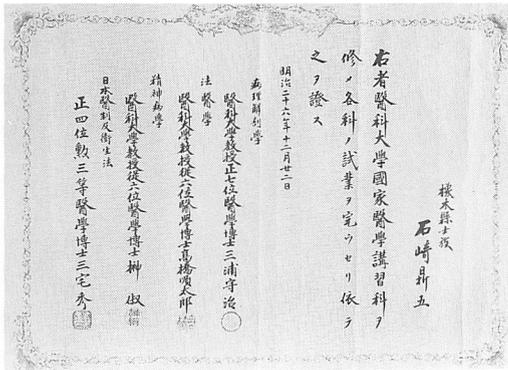


写真 5

来ないので、そのままにした。

後者は試験合格証であるため、担当主任各教授、即ち三浦守治、高橋順太郎、榊俣、三宅秀教授の名と印がある。両者共日付は明治二十六年十二月廿二日（講習科終了日）となっている。

七、記念写真と謝恩会

前述国家医学会雑誌第八十号⁽¹⁾掲載のように第九回講習科生徒は明治廿六年十二月二日帝国大学医科大学構内で教員、事務員、生徒全員が揃って記念撮影をした。この記事は後述する。

その後、同誌記事では上野櫻雲台で慰労の宴を開いたとあるが、鼎吾の記録では「湯島天神社内魚十、午後三時より」とある。

謝恩会は生徒全員の総意によるもので、左記の開催趣意書原稿が残っている。⁽²⁵⁾

「懇親会趣旨」

今般第九回国家医学講習ノ為メ各府県ヨリ遠ク筈ヲ東京ニ荷ヒ高等ノ医学ヲ学ブ豈ニ容易ノ業ナランヤ是レ他ナシ一ツハ国家公衆各自医事衛生ノ蘊奥ヲ極メ延テ国家公衆ノ健康ナル幸福ヲ企図センカ爲メナリ然リ而シテ毎月一堂ノ上会シ面識アツテ府県町村民相互ニ知ラサルモノ多シ故ニ将来友誼厚クシテ知識交換ノ目的ヲ以テ懇親会ヲ開カントス賛成ノ諸君ハ順次府県町村氏名等ヲ記載アランコトヲ希望ス

一但シ府県町村氏名ハ活版ニ付シ各自一葉ヲ所持スル

發起人

会費金五拾錢

活版料ハ成脱稿ノ上実費徴取

会場 湯島天神社内 魚十

但シ午後三時ヨリ

懇親会当日医科大学長宛に生徒総代連名で感謝状并に開会の趣旨が美濃紙に清書させて呈上された。⁽²⁶⁾ それを読みあげたのは石崎鼎吾であると考えられる。⁽²⁷⁾

「開会ノ趣旨

大学長各講師閣下并ニ事務員諸君ノ御光臨ヲ恭フシ茲ニ本会ヲ開キタルハ他ニ非ラス吾々カ遠ク笈ヲ東都ニ荷ヒ帝国大学ニ於テ国家医学ノ講習ヲ受ケ未タ終結ニ至ラサルモ其期殆ト旬日ニ迫マレリ依テ畧ホ国家医学ノ大意ヲ得領シタルハ之レ偏ニ恩恵ナル各講師閣下ノ懇篤ナル誘導ニ由ラスンバ能ハサルナリ故ニ国家医学終結ノ後務メテ之ヲ応用スルニ於テハ吾々一個ノ幸福ノミナラス延ヒテ国家人民ノ幸福ト云フモ豈ニ敢テ過言ニハ非ラサルベシ此ノ時ニ至リ始メテ一歩ヲ進メタルモノニシテ一步ハ已ニ百里ニ達スルノ起点ナリ百里ハ已ニ千里ニ達スルノ起点ナレバ吾々カ恩恵ナル各講師閣下ノ懇篤ナル誘導ニ報ユルハ国家医学ヲ実地ニ応用スルニ至ラスンバ能ハサル也然レトモ茲ニ廉酒廉肴ヲ進ムルハ数ヶ月間ノ慰勞ヲ謝シ聊カ其恩恵ニ報ヒ併テ大学長各講師閣下并ニ事務員諸君ノ健康ヲ禱リ帝国大学ノ万歳ヲ賀スル所以ナリ

明治二十六年十二月二日

国家医学講習科

総代

梅津 清中

犬飼 元良

岡野林次郎

目澤 富雄

石崎 鼎吾

記念写真を縮写して写真6に示した。⁽²⁷⁾

最前列は教授・助手・事務員で第二列からが講習科生徒である。原写真は四ツ切大に近く、各人が鮮明に確認できる。大版の台紙の裏には写真に合わせて出身地住所氏名が印刷されている。

最前列の事務員、教授、助手氏名を右よりのべる。

本郷区森川町一番地 百瀬達太郎

日本橋区薬研堀町三四番地 畑 定義

下谷区中根岸町八一番地 村上 庄太

帝国大学寄宿舎 教授 岡本 染松

麴町区富士見町二―三九 教授 高橋順太郎

本郷区駒込東片町一六〇 教授 緒方 正規

小石川区茗荷谷町三三 教授 片山 国嘉

本郷区駒込蓬来町四五 教授 小金井良精

本郷区竜岡町十七 教授 三宅 守治

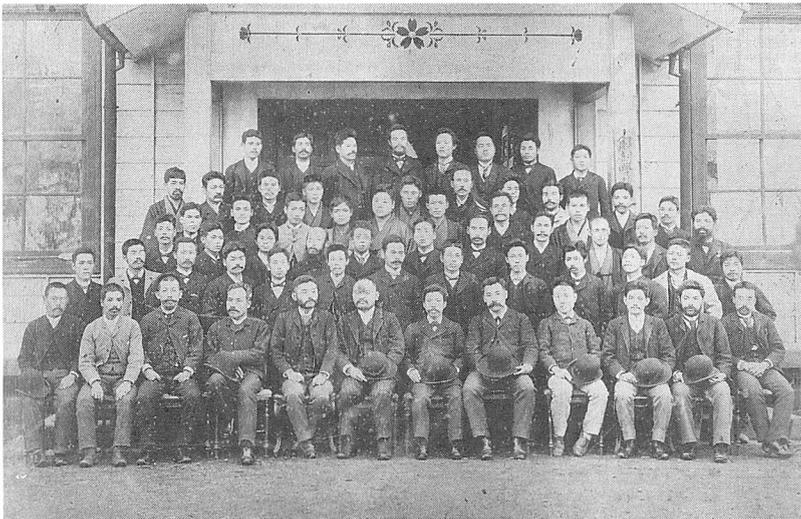


写真6 全員懇親会記念写真

本郷区湯島天神一―五三 竹崎 季薫

帝国大学衛生学教室 助手 富岡美矢太

本郷区駒込曙町七 市川 寛繁

本郷区駒込西片町十ノ十九 鈴木 忠行

第二列から生徒である。右よりのべる。

長野県東筑摩郡松本町飯田町 藤森亀太郎

福井県勝山町 高澤 透

石川県石川郡美川南町 内匠 益次

岩手県南閉伊郡大槌町 浅石 長雄

滋賀県近江国阪山郡大荘村寺田 下阪 禮吉

広島県安芸国豊田郡忠海町 松葉 暹

全 備後国中奴郡上下村 岡本 恭重

東京市神田区東松下町廿一 目澤 富雄

岡山県備中国下道郡二万村 木谷貴惣太

埼玉県秩父郡中川村 横田安十郎

滋賀県野州郡義王村 木村松五郎

長野県南安曇郡南穂高村 小穴 甫吉

第三列生徒氏名右より

大分県豊後国下毛郡中津町 大江 億司

福井県大野郡下庄村中野 金森 元貞

群馬県南勢多郡木瀬村 北爪 秀吉

東京市浅草区西仲町廿番地 小原 登

山形県南村山郡上山町 梅津 清中

宮城県宮城郡松島村手樽十九 二宮 以忠

秋田県秋田市土手長町上丁九 大越 恭英

宮城県志田郡古川町 犬飼 元良

福井県南條郡南日野村 林 義一

山口県長門国厚狭郡三国町今新久保田亀鶴

第四列生徒氏名右より

神奈川県三浦郡初声村 斎藤 研精

岡山県備中国後月郡西江原村 三村 尚斎

岐阜県不破郡府中村二十三 岩田芳之助

石川県能登国羽咋郡柏崎村宿 岡野林次郎

三重県度会郡神原村松山十三 西井梅太郎

宮城県磐城国伊具郡角田町 鈴木精一郎

京都府丹波国何鹿郡山家村 菅井 竹吉

山形県山形市八日町六八五 堀 禮治

東京市赤坂区青山権田原町十七 託摩 武彦

高知県香美郡赤岡村

田内 貞久

第五列生徒氏名右より

栃木県下都賀郡寒川村

赤井 泰亮

香川県豊田郡辻村

堯天 義央

栃木県下都賀郡壬生町三七三

石崎 鼎吾

福井県越前国坂井郡三国町大門

高比良照民

岡山県備中国後月郡井原村

船石 保太

高知県高岡郡新居村七十

中内 如恒

和歌山県有田郡湯浅仲町

橋爪 精一

香川県那珂郡丸亀大字風袋町

堀江 頼信

第六列生徒氏名右より

新潟県中頸城郡黒川村

竜島政太郎

福島県北会津郡若松町横三日町

赤羽 操

三重県伊勢国一志郡久居村四五

加藤 辰一

青森県弘前市南川端町五

竹内 軌英

福岡県三池郡大牟田町大牟田

蓮尾 春甫

福岡県筑後国山門郡下瀬高町

真島 丹吾

千葉県安房国朝夷郡千歳村

小澤 興

生徒の出身府県別分類では青森一、秋田一、岩手一、山形二、宮城三、福島一、群馬一、栃木二、埼玉一、東京三、

千葉一、神奈川一、長野二、新潟一、石川二、岐阜一、京都一、福井四、和歌山一、三重二、滋賀二、岡山三、香川二、高知二、広島二、山口一、大分一、福岡二、合計四十七名である。

八、奉答書及復命書

鼎吾は県内務部推薦により特選派出生として第九回国家医学講習科に入学したので、修了後栃木県知事宛に報告の義務があり、その報告書の控えが残っている。⁽²⁸⁾次にのべる。

「奉答書及復命書

不肖鼎吾謹テ知事閣下ニ復命ス明治廿五年第何月何日国家医学講習ノ為メ入学スヘキ者ニ特選セラルル然ルニ事故アツテ廿六日九月特選ノ命ニ応ス

廿六年九月七日笈ヲ荷ツテ東京ニ到ル不肖鼎吾齡ハ初老ニ重ントシ且ツ老母ハ七十当七ニシテ妻子六名アリ末女ハ未夕哺乳スルノミナラス一家ノ經濟ヲ老母妻子ニ託シ自費ヲ以テ笈ヲ荷ツテ東京ニ到ル豈ニ容易ノ業ナランヤ然レトモ知事ノ命辞スル能ハス廿六年九月七日出京セリ然ルニ入学期日ハ九月十五日ナレハ其間余リアリ依テ赤十字病院ニ到リ病体解剖ヲ実験シ且ツ順天堂病院東京病院杏雲堂病院ヲ得覩ス且ツ順天堂ハ日曜毎二日ハ手術ナルカ故ニ何十何ノ手術実験ヲ見学セリ

九月十五日大学ニ入学ス講義日割ハ表式ノ如クナリ

表式(略)

右ノ日割ニ応シ講習ノ概畧モ記載スルハ左ノ如シ

法医学上ニ就テ

以下省略

「

この記述に一致する葉書通知状が残っている。その内容は次の通り。⁽²⁹⁾

「前略陳者明十六日卯巢手術有之候間身体衣服可成清潔法御施行ニテ正午十二時頃迄ニ御来院御伝申候

十一月十六日

神田区宮本町一番地

大橋いちえ

石崎鼎吾殿

本郷湯島五丁目

順天堂講堂

九、壬生町の祝宴

鼎吾は国家医学講習科修了直後郷里壬生町に帰ると、町有志百数十名の企画で祝宴があつた。⁽³⁰⁾

「会場壬生町綿屋楼

石崎鼎吾君国家医学卒業帰町ニ付

祝宴会臨会者姓名簿

明治廿六年十二月廿五日 発起者

(後略)

十、考 察

明治中期、日本の近代化進歩に伴い医療行政の基本である予防、衛生、裁判医学の實際的運営に支障を起こしていた

ものと思われる。その結果帝国大学医科大學に国家医学講習科が設立され、全国的に臨床に従事する経験ある医師の中から生徒募集して教育し、医療行政の協力者を育てようとした。生徒募集の反響は大きく、明治二十三年開講以来応募者多数の為と行政上の必要性から二年間に五回講習が行われ、記録から推定して明治二十五年は第六回、第七回、同二十六年第八回、第九回、同二十七年一月第十回が開講された。ことに明治二十五年三月内容を充実して講習期間が十二週から四ヶ月に延長された。第七回以後の開講月日を見ると不定期で、必要に応じて生徒募集開講が行われている。第十回の生徒募集は第九回の授業の終了しない明治二十六年十二月締切りで行われ、同二十七年一月に開講している。講習科開講の成功と行政上の必要性から変化してきたものと思われる。

本講習科の記事は国家医学会雑誌に主として掲載されているので、本学会設立の経過を小関氏の研究から引用すると次の通りである。

「国政医学会は明治十六年長谷川泰らが東京私立国政医学研究会を開き、国政に関する医学を研究し以て司法及行政を補翼するを目的で旗上されたが、同氏の病気で延期され、二十年に到に穂積陳重らの協力を得て国政医学会と改称し正式発足した。国政医学とは精神病学・裁判医学・衛生学・医事法理等専ら国政に関する医学を指す。同年四月国政医学会雑誌を創刊、廿三年十月同会は国家医学会と改称、機関誌も国家医学会雑誌となった。」この学会は一九二四年社会医学会となり一九三二年東京医学会に合併され、同年十二月発刊された。

このことから国家医学講習科は官民一体となつて支持され、実績をあげたと考えたい。

本稿は生徒として研修を受けた石崎鼎吾の全記録を基にして作成した。講習科の実態がわかれば幸いである。

生徒は県特選派出（遣？）生と入学試験合格者の二種あり、講義・実習内容も充実している。生徒となるために沢山の書類が必要だったことと、修了証が二種あり、また講習期間中生徒から数名の取締（総代）が任命され、慰労金が出ているのも興味がある。

講習修了後盛大に謝恩会が開かれたことも時代を反映するものである。

十一、結 論

文献及び講義実習に参加した生徒(石崎鼎吾)の記録を中心にして、国家医学講習科発足時代の実態を明らかにした。

文 献

- (1) 東京大学百年史部局史二、第五篇医学部第一章通史二一頁、東京大学百年史編集委員会、東京大学発行一九八七(昭和六二年)
- (2) 中外医学新報第二百三十四号一三二八頁、国家医学講習科設置、一八八九(明治二十二年十二月二十五日)
- (3) 国家医学第一号雑報、医科大学国家医学講習科彙報、七二―七五頁、国家医学社一八一八九二(明治廿五年五月)
- (4) 国家医学講習科規則、謄写印刷、栃木県内務部、一八九二(明治廿五年)、石崎蔵書
- (5) 石崎鼎吾履歷書、自筆、一八八五(明治十八年)石崎蔵書
- (6) 医師開業免状(写)石崎鼎吾、一八八四(明治十七年五月十五日)、石崎蔵書
- (7) 国家医学第三号、国家医学講習科、五五頁、一八九二(明治廿五年七月) 国家医学社
- (8) 国家医学云雜誌第七十号、医科大学国家医学講習科修了者、五五頁、第八回国家医学講習科、五六頁、一八九三年(明治廿六年二月十五日) 国家医学云
- (9) 国家医学云雜誌第七四号 国家医学講習科卒業人名、同卒業生の祝宴、四二―四三頁、一八九三(明治廿六年六月十五日) 同学会
- (10) 国家医学云雜誌第七五号、国家医学講習科及撰科生入学試業の結果並問題、三六頁、一八九三(明治廿六年七月十五日) 同学会
- (11) 国家医学云雜誌第七七号、国家医学講習科入学者氏名、四四―四五頁、一八九三(明治廿六年九月十五日) 同学会
- (12) 国家医学云雜誌第八十号、国家医学講習科、一五一―一六頁、一八九三(明治廿六年十二月十五日) 同学会

- (13) 国家医学会雑誌第八二号、医科大学国家医学講習科、四五頁、一八九四(明治廿七年二月十五日) 同学会
- (14) 石崎鼎吾宛栃木県内務部公文書、一八九〇(明治二十三年十二月) 石崎蔵書
- (15) 石崎鼎吾宛公文書、栃木県内務部、一八九二(明治廿五年)、石崎蔵書
- (16) 石崎鼎吾宛公文書、栃木県内務部、一八九三(明治廿六年)、石崎蔵書
- (17) 石崎鼎吾講義筆記ノ一ト、一八九三(明治廿六年)、石崎蔵書
- (18) 石崎鼎吾講義筆記ノ一ト、一八九三(明治廿六年)、石崎蔵書
- (19) 石崎鼎吾講義筆記ノ一ト、一八九三(明治廿六年)、石崎蔵書
- (20) 石崎鼎吾辞令、病院、一八九三(明治廿六年)、石崎蔵書
- (21) 石崎鼎吾辞令、病院、一八九三(明治廿六年)、石崎蔵書
- (22) 石崎鼎吾、講義筆記ノ一ト、一八九三(明治廿六年)、石崎蔵書
- (23) 国家医科講習科修了証書、医科大学、一八九三(明治廿六年)、石崎蔵書
- (24) 全修了試験合格証書、各担当教授官氏名及押印、一八九三(明治廿六年)、石崎蔵書
- (25) 謝恩懇親会開催趣旨案(全生徒の賛否を問う)、一八九三(明治廿六年)、石崎蔵書
- (26) 懇親会、大学長宛感謝并に開会趣旨、一八九三(明治廿六年)、石崎蔵書
- (27) 集合記念写真(大版、台紙付)、一八九三(明治廿六年)、石崎蔵書
- (28) 石崎鼎吾、知事宛奉答書及復命書(控)、一八九三(明治廿六年) 石崎蔵書
- (29) 順天堂病院より石崎鼎吾宛葉書通知書、一八九三(明治廿六年) 石崎蔵書
- (30) 壬生町有志祝宴發起人名簿、一八九三(明治廿六年十二月廿五日) 石崎蔵書
- (27) 小関恒雄、「医史学」質問解答欄、明治期医学医事団体の変遷、③国政医学会、日本医事新報、三七一六号、一四〇頁、
一九九五(平成七年七月十五日)
- (28) 済生学舎と長谷川泰、一八五頁、日本医事新報社、一九九六(平成八年八月)

Government Supplementary Medical Course Aimed at the Improvement of Knowledge of Preventive Medicine and Hygiene for Medical Practitioners

by Tatsushi ISHIZAKI

In the Meiji Era, the improvement of knowledge of preventive medicine and hygiene among medical practitioners through out all of Japan was needed by the government.

A supplementary medical course was started in 1890, and nine courses were finished by 1893. It was revised in 1892, when its duration was extended from twelve weeks to four months, its number of students was increased from 30 to 50, and its lectures and training were revised. This course was opened at the medical college of the Imperial University of Tokyo.

(49)

This course consisted of lectures and training in legal medicine, psychiatry, hygienic medicine, patho-anatomy, toxicology and bacteriology.

There were two categories of students selected ; one was persons selected by prefectural recommendation and the other was the successful candidates of the entrance examination.

In the teaching, during weekdays, main lectures in above-mentioned subjects were held in the morning, and clinical visits were made in the afternoon.

Five controllers were officially appointed by the College from among the students in order to manage the course.

At the end of the course, final examinations were held. Then two types of certificates were issued

349

by the College ; one was a certification of graduation from the whole course and the other certified success in the final examinations.

At the end, a souvenir picture of all professors and students was taken, and then a testimonial dinner was given by the students.